那珂市市制施行10周記念協賛事業

水郡線全線開通８０周年記念

「根本　正ゆかりの地を訪ねる旅」

１．期　　日　　平成２６年１０月５日（日）

２．行　　先　　大子町、福島県石川町・棚倉町・塙　町

３．交　　通　　往路上菅谷駅　～　常陸大子駅間は水郡線利用
常陸大子駅より以降は観光バス（茨城交通）利用

４．行　　程

順番	見学先等		予定時間
1	出　発	上菅谷駅発 常陸大子駅着	AM　７：４９ AM　８：５０
2	石川町	水郡鉄道の碑 自由民権運動発祥の地碑 石川町立民俗資料館	AM１０：２０～１１：４０
3	棚倉町	昼　食（ルネサンス棚倉） 棚倉城跡・赤館城跡	PM１２：１０～１３：００ PM１３：２０～１４：００
4	塙　町	向ヶ岡公園水郡鉄道完成記念碑 田中愿蔵記念碑 道の駅　塙	PM１４：２０～１５：１０
5	大子町	駅前根本　正胸像 十二所神社胸像跡	PM１５：４０～１６：２０
6	帰　着	上菅谷駅前	PM１７：３０分

５．見学先関係資料

６．参加者名簿

主　催　　根本　正顕彰会

後　援　　那　珂　市

「根本正の生涯」に関しては
ホームページ　及び　YouTube の「根本正顕彰会」を検索しご覧下さい。

水郡線名のうつりかわり

明治32年(1899)…… ① 太田鉄道(会社)
(太田～水戸)

〃 34〃(1901)…… ② 水戸鉄道(〃)

〃 42〃(1909)…… × 白萩線(白河～高萩) ・ ○ 平郡線 → 白石横美計画

〃 44〃(1911)…… 白水線(鉄道院)
(白河 水戸)

大正 2〃(1913)…… 水郡鉄道(〃)
(水戸～郡山)

〃 7〃(1918)…… (上菅谷～常陸大宮)

〃 8〃(1919)…… ③ 大郡線(〃)
(常陸大宮～郡山)

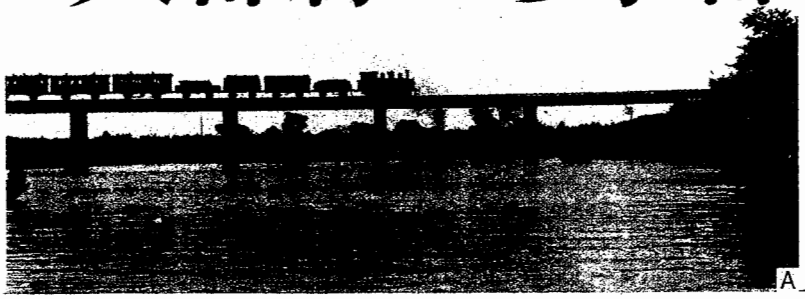
昭和 2〃(1927)…… ④ 水郡線(鉄道省)
(水戸～郡山)

〃 4〃(1929)…… ⑤ 水郡北線・⑥ 水郡南線(〃)
(郡山～南・大子～北)

〃 9〃(1934)…… ⑦ 水郡線(水戸～郡山)
12.4

全線開通(〃) 80周年
平成26年(2014)

私鉄から始まり 大郡線から水郡線へ



大正末期、那珂川を渡る水戸鉄道の列車。2軸の貨車・客車で編成された混合列車で、川面には汽船も見える

A

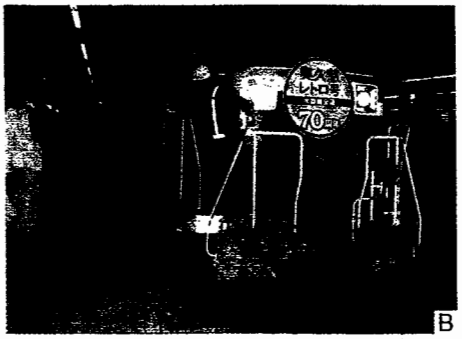
水郡線の最初の開通区間は、現在は支線の区間だった。1897（明治30）年11月①太田鉄道による水戸～久慈川（額田駅の先で久慈川南岸に開業、後に廃止）間である。99（明治32）年4月に太田（現・常陸太田）まで延伸したが、経営状態が悪く1901（明治34）年10月に②水戸鉄道（水戸線を建設した水戸鉄道とは別会社）に事業を譲渡。18（大正7）年6月に、本線の上菅谷～瓜連間が開通し、同年10月に常陸大宮まで開通した。

常陸大宮以北は鉄道省が③大郡線の名称で建設した。山方宿、上小川と順次路線を延伸し、27（昭和2）年3月に常陸大宮～常陸大子間が開通。そして同年12月、国は水戸鉄道を買収した。これは、鉄道省が建設・経営する常陸大宮～常陸大子～郡山間と一貫経営するという狙いからで、買収と同時に線名は④水郡線と改められた。

北側の建設は水戸鉄道を買収した27（昭和2）年に始まり、笹川（現・安積永盛）～⑤谷田川間が29（昭和4）年5月に水郡北線として開業した。同時に既存の水戸～常陸大子間は⑥水郡南線となった。以後は南北から建設が進められ、34（昭和9）年12月に磐城棚倉～川東間が開通して全通。南線・北線を統合して、路線名は再び⑦水郡線に戻った。

列車は、大郡線だった時代から水戸鉄道に乗り入れて水戸発着としており、北線も水郡北線としての開業当初から東北本線に乗り入れて郡山発着だった。気動車の運転は戦前に水戸～常陸大宮間で開始していたが、戦時下に燃料不足で中止となった後、戦後は55（昭和30）年12月から再開された。

優等列車は、58（昭和33）年11月に臨時準急「奥久慈」が設定されて、常磐線経由で上野から矢祭山まで直通したほか、64（昭和39）年からの一時期は準急「スカイライン」「久慈川」が運転されたこともある。しかし、83（昭和58）年に急行「奥久慈」の水郡線内は普通列車になり、85（昭和60）年廃止。以後、定期の優等列車は運転されていない。



2004年11月、全通70周年記念として運転された旧型客車の「奥久慈レトロ」号

B

水郡線の発案者

（白石禎美氏肖像）

（1880－1962）

水郡線の産婆役

（白石義郎氏肖像）

（1861－1915）

水郡線完成に尽力

根本 正

（1851－1933）

1 自由民権運動と福島

會澤義雄

1　イギリスの自由主義思想や天賦人権説の紹介

不満を持つ士族・開明派士族・弁護士・ジャーナリスト ・教員などの知識階級・地方の豪農・豪商層が中心になり国会開設を求める民主主義的要求

2　西南戦争後、明治政府の権力はますます強大になったが、初期の資本家や農民の　民主的要求は盛んになっていった。

明治１３年（１８８０）…国会期成同盟の結成…自由民権運動の最初の高まりが起きる。

① 土佐の立志社－板垣退助創設
② 東北の石陽社－河野広中（福島県）

この２社を中心に２府２２県の８７０００人の代表１８４人が大阪に集まり国会開設を迫る。

3 新政府の対応

明治１３年　集会条例公布…反政府運動を取り締まる。
政治結社・集会の届出制、政治結社間の連絡や屋外集会の禁止
↑
福沢諭吉・中江兆民…啓蒙運動を進める－民権運動強まる

明治１４年 北海道開拓使官有物払い下げ事件…開拓使長官黒田清輝
政府北海道開拓に１４００万円投資→同郷（薩摩）の関西貿易会へ無利子３８万円で払い下げた事件
↓
伊藤博文払い下げ中止
↓
板垣退助・河野広中ら全国遊説…各地で共鳴者増加

4 福島事件と三島通庸

新政府はあらゆる手段で自由党を中心とする自由民権運動を圧殺しようとした。河野広中を中心として運動の盛んな福島県に明治１５年三島通庸を県令として派遣した。同１６年には栃木県令を兼務した。三島は「自由党と火付け・泥棒は県内にはおかない」と自由党を弾圧した。

三島は県令に出るとき次の内命を受けたといわれる。

①自由党の撲滅　　②帝政党の育成(薩長藩閥政府の御用党)
③会津三方道路の建設
会津６郡の１５～６０歳の男女に２年間毎月１日の扶役の強制を課した。
道路工事代、人夫賃の徴収開始
県議会は自由党優勢…河野広中議長を中心に議案前号否決し、農民は抵抗し訴訟運動を展開し対立激化する。
農民数千人が喜多方署に押し寄せる。２０００人が検挙され、国事犯として河野広中ら自由党首脳が処罰され、福島の自由党は壊滅した。これが加波山事件を誘発した。

5 石川町と自由民権運動

明治７年（１８７４）９月、河野広中は石川区長として赴任
明治１０年土佐を訪問して板垣退助と会談
明治１４年３月東北自由党結成、河野県会議長となる。
同　１０月石川自由党会議開催、自由党福島部の結成
同　１５年福島・喜多方事件起こる。

石川町の人たちは自由民権運動に早くから参加し、東北地方の運動は最初に石川町で始まったので自由民権運動の発祥地といわれる。河野の主張に共鳴し神官・元庄屋・医者・教師・豪農・村役人が参加している。政治結社として最初に石陽社ができ、次いで第２　鳴社ができている。この政治結社には県内ばかりでなく宮城・山形・茨城・栃木・福井県などからの参加者がありました。中央に自由党や立憲改進党ができると石川の人たちも参加し演説会がたびたび開かれました。河野広中・吉田政雄は国会議員として活躍しました。他の活動家も県会議員・町村長として活躍している。石川町では貴重な文化財が大切に保存され、役場の敷地には自由民権運動発祥地の記念碑がある。また町内には演説した場所が記念碑として保存されている。

6 栃木から加波山事件へ

自由民権運動の記念碑（石川町庁舎前）

Ⅱ 原子爆弾の製造を研究していた理化学研究所が石川町へ疎開してきた
－石川町の希元素鉱物と『二号研究』のかかわり－

1　石川町の位置

南部阿武隈山地西縁…国内における最大級のペグマタイト鉱床がある。学校法人石川高等校校長森嘉種は、当時の帝國大学の地質鉱物学者と交流し石川地方の鉱物資源を有名にした先覚者である。

※ペグマタイト鉱床…深成岩に分類される花崗岩類とほぼ同じ鉱物構成を持つが、主成分鉱物の石英・長石が大きく結晶した集合体を呼んでいる。一般的には地殻中に存在量が少なく、やや多くても凝縮しにくい元素を「希元素」といい、現在は『レアアース』と呼ばれている。

2　希元素開発の経過

大正１１年（１９２２）石川町から発見された未知の強放射性鉱物は、東大の柴田雄次・木村健二郎の研究で「磐城石川産サマルスキー石および一新鉱物について」と題する論文が発表された。「一新鉱物」は石川石と命名された。

昭和７年　中性子発見される。

同　１３年 中性子を弾丸としてウラン２３５の原子に衝突させると巨大な熱エネルギーが生み出されることがわかった。この結果、世界の国々は原子核エネルギーの研究を推進し、有能な科学者は軍事研究に追いやられた。この６年半後に我が国に原子爆弾が投下された。

↓

『科学には国境はないが、科学者には祖国があった』

同１９年 ８月、石川鉱業所の森元博親から２代目石川校長森深造（秋田鉱専卒）に指導協力依頼あり（石川郡石川町および野木沢地内に産出する軍納特殊鉱物サマルスキー・緑柱石などの採取）。

同８月24日 の陸軍文書…希元素鉱物資源実施計画

新兵器材料として「ウラン」・「タンタル」・「ベリリュウム」の資源調査を石川町に求めるべく採掘調査・選考に関する研究・経費の内訳・調査担当者が記されている。担当者の一員として森校長の名が嘱託者として記され、本調査に関して第八陸軍技術研究所分室を石川中学校（現・高等学校）に設置する旨が書かれている。

同19年９月29日の理化学研究所飯盛研究室からの文書によると、採掘にはたくさんの労働力が必要になるので石川中学校の一部を動員するのがよい。そのためにも森校長を第八陸軍技術研究所の嘱託にするのが望ましいとの記録がある。

同20年１月16日　第八陸軍技術研究所飯盛嘱託から「希元素鉱床急速開発」に関

する希望が出されている。

同２月 12 日 の陸軍文書…採掘に要する労働者として勤報隊。修練生。学徒（中学生）。大日本婦人会会員を当てるとある。

石川中学校（150 名）　うち 100 名…飛行場建設に動員

50 名…希元素採掘現場に動員

3 石川町へ疎開してきた理化学研究所飯盛研究室とは

1）大正６年（１９１７）創立…皇室下賜金。政府補助金。民間寄付金で創設された半官半民の財団法人。

初代所長　菊池大麓（箕作秋坪の次男）…東大。京大総長。文部大臣学士院長を歴任。

2）昭和９年 理化学研究所飯盛研究室…日本の統治下にあった朝鮮半島全域を調査し、トリウムや希土類元素の原石であるモナズ石を大量に入手できる成果を上げ、京城郊外に「理研朝鮮工業所」をもうけている。

3）昭和 10 年 理研内に「研究室工場」を設けウラン鉱石の精錬を始める。

同　年　石川郡玉川村川辺で約１年間希元素鉱物の試掘を行う。

4）同 15 年　鉱山師丸野内鉄之助…石川地域で特殊鋼生産に欠かせない風化花崗岩ジルコン（ジルコニュウム）発見、石川町立ヶ丘に簡易選鉱試験場を設ける。

5）同 15 年　国家総動員法により企業整備命令が出され、軍需産業に転用されていった。

6）同 19 年　丸野内鉄之助は軍需省の援助を受け、石川町高田地内に選鉱嬢『日本ジルコン鉱業研究所』（石川鉱山）を設け生産拡大

7）同 20 年４月、日本ジルコン鉱業研究所の選鉱場は、軍の命令で急遽理化学研究所に委譲され「理研希元素工業扶桑８０６工場」と改組された。

その理由とは次のようなことによる。

「昭和 17 年 12 月、第八陸軍技術研究所の要請を受けた理化学研究所仁科研究室で＜ウラン２３５＞に関する研究が進められていたが、昭和 20 年４月 13 日の空襲で理研工場が被災したので、ウラン鉱石の確保とウラン塩を製造していた飯盛研究室が石川町に緊急疎開し製造事業を続行する必要があった為であった。」（『ペグマタイトの記憶』石川町教育委員会）

工場では主に朝鮮半島やマレー半島から運ばれてきた黒砂を選鉱し化学処理していた。

4 我が国における原子核分裂エネルギー研究

昭和 16 年 12 月８日、太平洋戦争が勃発すると、軍首脳は原子核エネルギーを用いた新兵器が戦争の運命を決定すると考え、機密名の研究開発を研究機関に委託した。

1）陸　軍…理化学研究所の仁科研究室…『二 号 作 戦』
昭和16年陸軍航空技術研究所は理化学研究所に新兵器が可能か尋ねている。昭和18年可能と考えられると答えている。

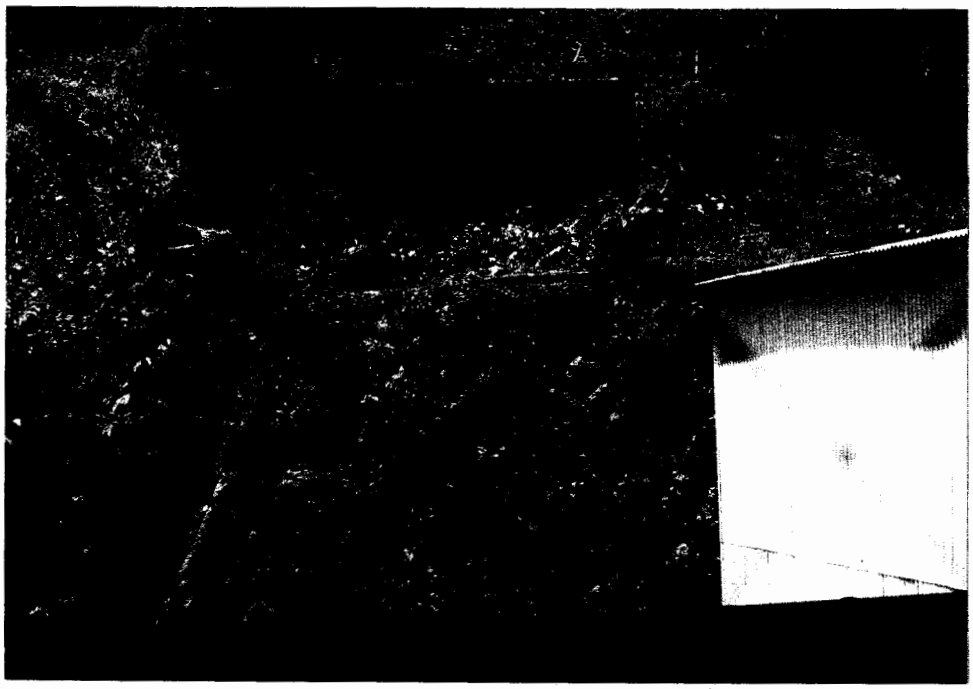
2）海　軍…京都大学の荒勝文策研究室…『F 研 究』
海軍艦政本部の委託研究

3）大阪大学の菊池正士研究室

↑

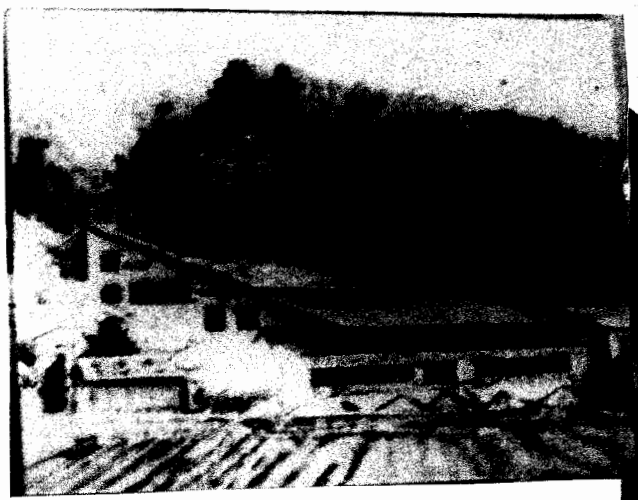
4）原　料　班…理化学研究所飯盛研究室（飯盛里安）
ウラン鉱石の調査・イエローケーキの精製担当

1）～3）の3拠点を中心に研究開発が行われた。



理研希元素工業扶桑８０６工場跡

参考文献 ペグマタイトの記憶（石川町教育委員会）



理研希元素工業扶桑８０６工場

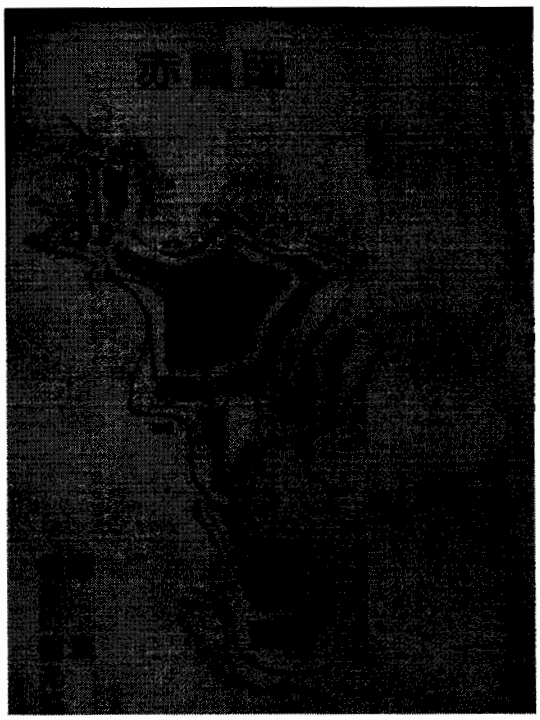
鉱石採掘に動員された石川中学校の生徒達

赤舘城と棚倉城

平成２６年１０月５日（日）

赤舘城

応永年中（１３９４～１４２７）伊達家の居城。　建武年中伊達系統の田村氏居城とす
伊達家会津方面へ移り、白河結城氏領として一族が居住
武田信玄・北條氏直 ←×→ 佐竹義重・上杉謙信 岩城・浅川 ←×→ 伊達政宗・芦名盛氏・白川義親（**赤舘城**：白川結城氏が支城）
元亀２年（1571）芦名盛氏赤舘城郭再構築 → 芦名氏、芦名氏の婿＝白川結城氏を配下とす
天正 2年（1574） 2月・9月　佐竹×白川・芦名と赤舘城をめぐって攻防戦、佐竹義重敗退
天正 3年（1575） 7月、佐竹義重・義宣、赤舘城を支配下へ（東義久守衛＝奥州攻めの前衛）
天正 6年（1578） 白川の名跡を佐竹義重の２男喝食丸（義広）を継ぐ（佐竹、白川を配下に）
天正 13年（1585）伊達政宗、二本松城主畠山義継と対立 ←×→ 蘆名・岩城・石川・佐竹
天正 14年（1586）二本松城落城、翌 15年芦名家へ白川義勝（喝食丸）入り黒川城主に（盛重）
天正 17年（1589）佐竹義重・蘆名盛重ら会津摺上原の戦で伊達政宗に敗北
赤舘戦争（浅川・石川・白川らの向背で戦況混迷、佐竹：**東義久赤舘死守**）



慶長 5年（1600）関ヶ原の合戦
義重、赤舘城にて動静を観察
慶長 7年（1602）佐竹義宣、秋田へ移封

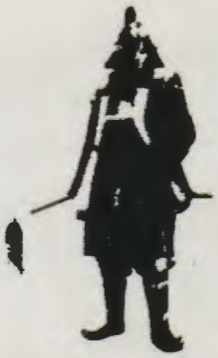
慶長 9年（1604）立花宗茂、柳川より移封
元和 8年（1622）丹羽長秀の嫡子長重、常陸国古渡 1万石、江戸崎 2万石から移封（5万石）
築城：赤舘 → 明神境内
寛永 2年（1625） **棚倉城築城**（近津城：亀ケ城）
寛永 4年（1627）長重、白河へ移封（小峰城）
長浜城主内藤信照（譜代）入部 5万石
３代 78年（譜代大名）、

奥州守衛南端固め＝譜代大名で
（**若松**：保科正之）　（**棚倉**：内藤信照）
（**磐城平**：内藤政長）（**白河**：榊原忠次、本多、奥平松平、結城松平）

←（赤舘城跡）

棚倉藩主　（棚倉城跡遠望）→
丹羽、内藤（78）、太田、松平、小笠原（70）
井上（19）、松平（4代、幕末康英老中）、
阿部（白河より＝戊辰戦争=奥羽列藩同盟）

南奥州、関東周辺の戦国大名



南部氏
葛西氏
最上氏
伊達氏
長尾・上杉氏
蘆名氏
那須氏
上野
大関氏
宇都宮氏
上杉氏
下野
小山氏
佐竹氏
小野崎氏
常陸
額田氏
江戸氏
笠間氏
水谷氏
真壁氏
大掾氏
小田氏
多賀谷氏
菅谷氏
岡見氏
土岐氏
島崎氏
鹿島氏
玉造氏
畑田氏
結城氏
古河公方家
武蔵
下総
相模
北条氏
里見氏
土岐氏
正木氏
安西氏
安房

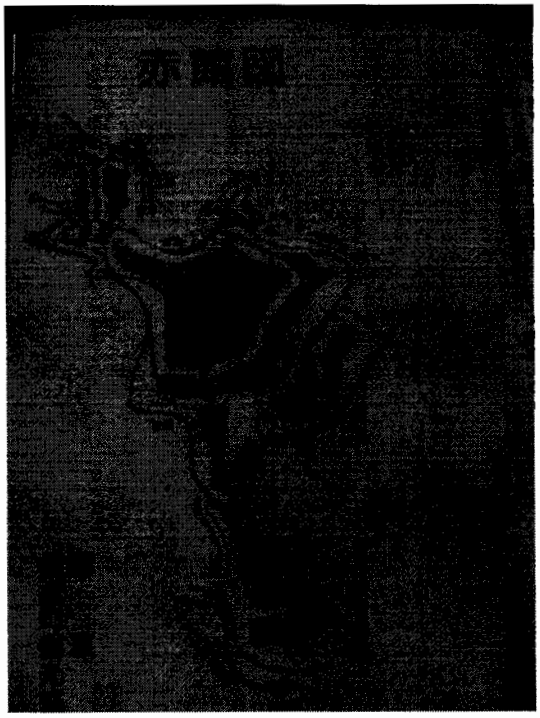
「風雲戦国史　戦国武将の家紋」　ホームページより

赤舘城と棚倉城

平成２６年１０月５日（日）

赤舘城

応永年中（１３９４～１４２７）伊達家の居城。　建武年中伊達系統の田村氏居城とす
伊達家会津方面へ移り、白河結城氏領として一族が居住
武田信玄・北條氏直 ←×→ 佐竹義重・上杉謙信 岩城・浅川 ←×→ 伊達政宗・芦名盛氏・白川義親（**赤舘城**：白川結城氏が支城）
元亀２年（1571）芦名盛氏赤舘城郭再構築 → 芦名氏、芦名氏の婿＝白川結城氏を配下とす
天正 2 年（1574）　2 月・9 月　佐竹×白川・芦名と赤舘城をめぐって攻防戦、佐竹義重敗退
天正 3 年（1575）　7 月、佐竹義重・義宣、赤舘城を支配下へ（東義久守衛＝奥州攻めの前衛）
天正 6 年（1578）　白川の名跡を佐竹義重の２男喝食丸（義広）を継ぐ（佐竹、白川を配下に）
天正 13 年（1585）伊達政宗、二本松城主畠山義継と対立 ←×→ 蘆名・岩城・石川・佐竹
天正 14 年（1586）二本松城落城、翌 15 年芦名家へ白川義勝（喝食丸）入り黒川城主に（盛重）
天正 17 年（1589）佐竹義重・蘆名盛重ら会津摺上原の戦で伊達政宗に敗北
赤舘戦争（浅川・石川・白川らの向背で戦況混迷、佐竹：**東義久赤舘死守**）



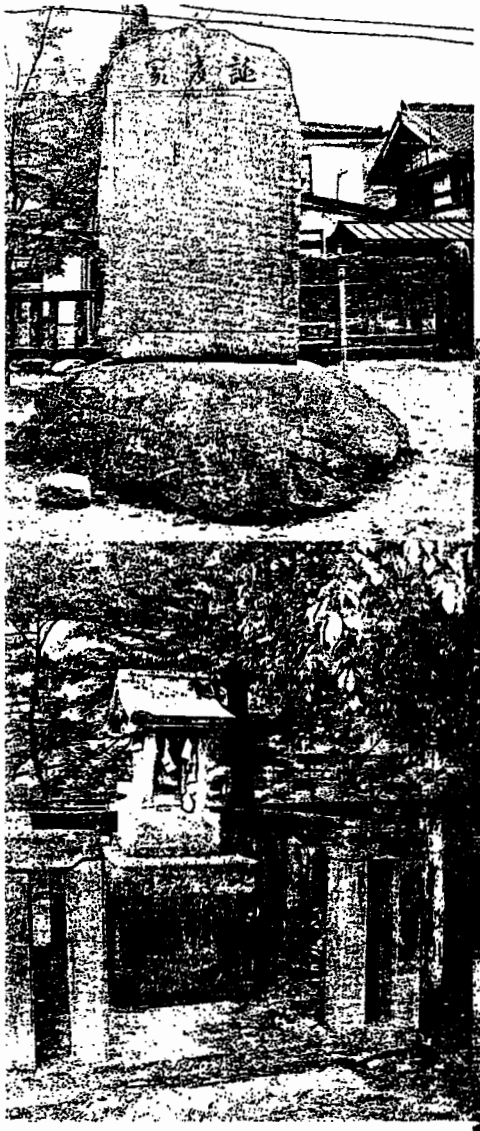
慶長 5 年（1600）関ヶ原の合戦
義重、赤舘城にて動静を観察
慶長 7 年（1602）佐竹義宣、秋田へ移封

慶長 9 年（1604）立花宗茂、柳川より移封
元和 8 年（1622）丹羽長秀の嫡子長重、常陸国古渡 1 万石、江戸崎 2 万石から移封（5 万石）
築城：赤舘 → 明神境内
寛永 2 年（1625）　**棚倉城築城**（近津城：亀ケ城）
寛永 4 年（1627）長重、白河へ移封（小峰城）
長浜城主内藤信照（譜代）入部 5 万石
３代 78 年（譜代大名）、

←（赤舘城跡）

奥州守衛南端固め＝譜代大名で
（若松：保科正之）　（**棚倉**：内藤信照）
（**磐城平**：内藤政長）（**白河**：榊原忠次、本多、奥平松平、結城松平）

棚倉藩主　（棚倉城跡遠望）→
丹羽、内藤（78）、太田、松平、小笠原（70）
井上（19）、松平（4 代、幕末康英老中）、
阿部（白河より＝戊辰戦争=奥羽列藩同盟）



町指定史跡

向　ヶ　岡　公　園

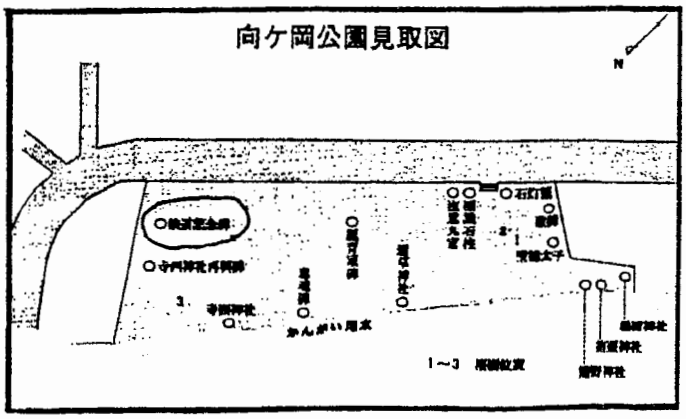
塙町指定　昭和51年９月21日
所 在 地　大字塙字川向道上104

公園とはいえ、現有面積約818平方メートル程で、外部は石垣によって境界を限られてある。これは、県指定天然記念物の枝垂桜保護のため整備されたもので、故金沢春友翁の尽力によるもの、南側に県道が開かれた明治18年以前は九ツ山への山続きの岡であった。

この公園は規模こそ小さいが、寺西代官によって、庶民のいこいの場として造られたもの。時に寛政５年（1793）であり、本邦の庶民公園の鼻祖と云うべきものである。

園内には、文政２年寺西代官の最たる治積を後世に遺す誕育家がある。

熊野社があるため、別名熊の森公園という。向ヶ岡とは、塙陣屋から見て名づけたものと、先師は云っている。



㉛

水郡鐵道完成記念碑

福島縣白川地方ハ古来両羽及ビ越後ヨリ常陸水戸ヲ経テ江戸ニ至ル孔道ニシテ上地肥沃交通頻繁加フルニ農産林産及ビ鑛物ニ富メル地ナリ　然ルニ維新以来明治ノ中葉時代ニ至ルモ交通機関ハ僅ニ中央ヲ貫通スル東北本線ト東海岸ニ沿ヘル常磐線トアルノミニ止マリ縣南地方ハ文化ノ恵澤ニ浴スルコト能ハザルモノ茲ニ歳アリ　白石禎美君深ク之ヲ慨シ當時北海道選出代議士白石義郎君ト晋議リ自ラ進テ身ヲ政黨ニ投シ東北本線ト海岸線トヲ聯絡スル白河高萩間ノ横断線ヲ縣南地方ニ求メ其ノ先鞭ヲ著ケンコトヲ企テタリ而シテ君等ノ計畫ハ時機未ダ熟セサルヲ以テ空シク蹉跌ニ帰シタリ

君等ノ堅忍不抜ナル失敗ノ為ニ其志ヲ屈スルモノニアラズ　君等ハ更ニ白河高萩間ノ横断線ニ換フルニ白河水戸間ヲ聯絡スル縦断線ヲ以テシ茨城縣選出代議士根本正君等ト與ニ政府當路者ノ間ニ奔走スル所アリ　其後之ヲ水郡線ト改称シ極力之ガ實現運動ヲ継續シタリ　而シテ君等ノ提出シタル水郡鐵道建設案ハ明治四十五年三月六日ヲ以テ帝國議會ヲ通過セシガ爾来幾多ノ波瀾曲折ヲ経大正十年六月始メテ該鐵道起工式ヲ擧ゲ翌年第一期工程ヲ竣リ今茲十二月全線ノ完成ヲ見ルニ至ルマデ幾ンド十有四年ヲ閲シタリ

顧フニ該鐵道計畫以来前後二十有八年　苦心経營ノ結果國家事業トシテ終ニ能ク多年ノ懸案ヲ解決スルヲ得タルモノ畢竟君等ガ地方ノ資源開發ト國利民福ノ増進トヲ以テ己レノ任トナシ至誠一貫其ノ終始ヲ全ウシタル功ニ帰セザルヲ得ズ　頃者該鐵道完成ノ域ニ際シ有志ノ士両君ノ功績ヲ追念シテ已マズ　碑ヲ建テ之ヲ不朽ニ傳ヘントス予ニ嘱スル其擧ノ世道人心ニ裨益スル所少小ナラザルモノアルヲ嘉シ乃チ其ノ梗槩ヲ叙シ之ヲ石ニ鐫ラシム

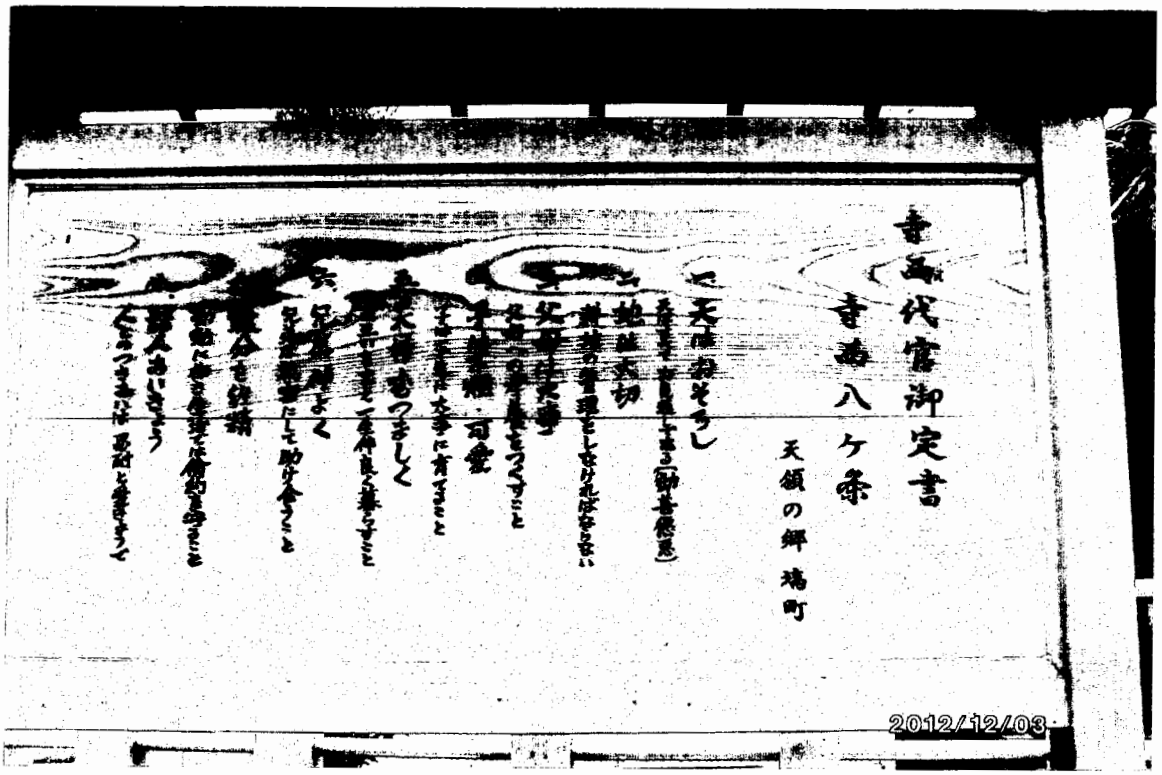
昭和九年八月下浣

蘇峰　徳富猪一郎撰
白雲　山内貞次書

（水郡鐵道完成記念碑）

（福島縣東白川郡常豊村塙・向ヶ岡公園内）

9-2

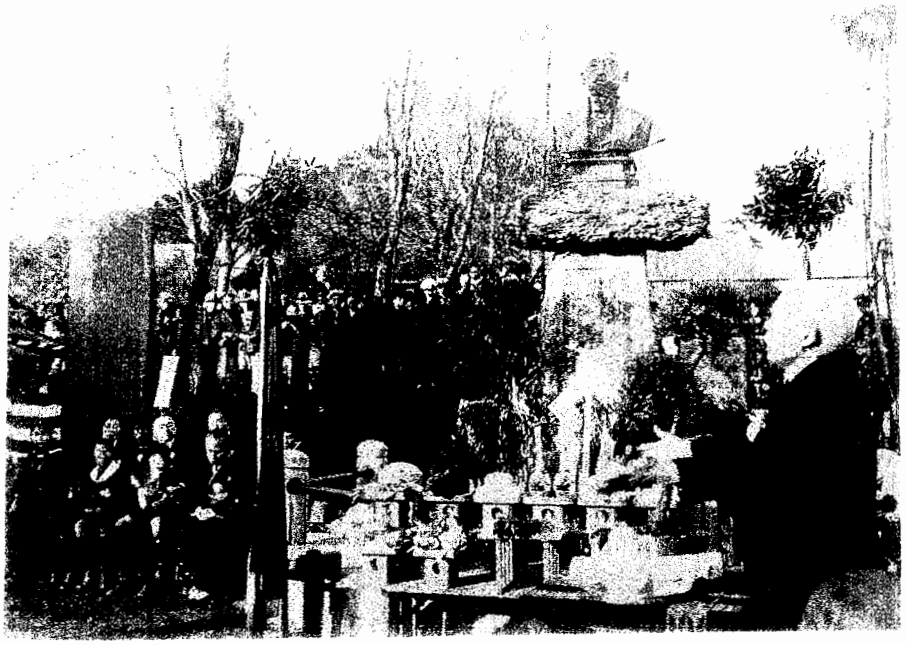


寺西代官御定書（塙町・向ヶ岡公園）

○田中愿蔵（げんぞう）刑場跡の碑（道の駅塙）

天狗党の青年将校とも言うべき田中愿蔵が処刑された「刑場跡の碑」が道の駅の構内左手植え込みの中に囲われて立っています

田中隊は元治元年（一八六四年）那珂湊の戦いの際に助川海防城を一時占拠しましたが、幕府側に攻められ、城に放火し、血路を開いて山路をたどり、八溝山に到達、ここで隊を解散、福島側の真名畑の山小屋に潜んでいるところを捕らわれ、久慈川べりの刑場で斬首の刑に処せられたのです。二十一歳でした。塙町の安楽寺には墓があります。



昭和５年、銅像除幕式で人々に謝辞を述べる根本正（右）

大郡線大宮―大子間は、鉄道省によって昭和二年三月開通する。水戸鉄道（安田経営）は、既に水戸―太田・大宮間を営業していた。

昭和二年十二月一日鉄道省は、水戸鉄道を買収し、本線名を大郡線から水郡線と改めた。

さらに、郡山より南へ伸びる線を水郡北線、大子より北へ伸びる線を水郡南線と称した。南北線それぞれに工事が進行したが、地形的に有利な南線は順調に伸びていった。

昭和　五・　四・一六　水郡南線下野宮―東館間開通

一二・　七　大子町十二所神社前に、根本正の胸像、記念碑を建立。除幕式を行う。

この事業は、佐原村の神永秀介、大子町の石井栄次郎らが中心となり、久慈郡、那珂郡および福島県に至る沿線町村の広汎な有志の寄付金（六九〇〇円）によって行われた。胸像は、彫刻界の大家大熊氏広の作で、台付高さ三尺七寸五分。製作費は二三八六円であった。

昭和四十三年、大子駅開通四十周年を記念して、駅前に胸像と記念碑が再建された。碑文は次の通りである。

根本　正胸像（常陸大子駅前）

久慈ノ清流ニ沿ウテ快走スル水郡線列車ヲ望見スルトキ根本先生ヲ想フコト切ナルモノガアル、先生ハ嘉永四年那珂郡旧五台村ニ生マレタ、父徳孝母ハヤ、ソノ二男デアル、幼ニシテ好学勤勉、明治十年、大志ヲ抱イテ米国ニ渡リ近代政治家トシテノ研鑽ヲ積ミ、業成ッテ帰朝、直チニ活動ヲ始メ、先ズ官命ヲ受ケテメキシコ、中南米、印度、ビルマ等ヲ視察シ、移民貿易ニ関スル献策ヲ重ネタ、三十一年衆議院議員ニ当選シテカラ国政ニ関与スルコト二十六年、コノ間、国民教育ノ基礎確立、未成年者禁煙禁酒法案ノ成立等ニ貢献スルトコロ大デアッタガ、特ニ水郡線建設ニ就イテハ四十四年建議案ヲ国会ニ提出シテカラ予算成立ニ到ルマデ所志貫徹ニ実ニ十年ノ歳月ヲ送迎シタ、先生ノ高志ト之ニ和シタ郷土有志ノ誠意ガ結晶シ全線開通ノ日ヲ迎エタノハ昭和五年デアル、茲ニオイテ先生ヲ欽仰スル有志ハ同年大子町十二所神社境内ニ胸像ヲ建立シタガ太平洋戦争中政府ノ回収ニヨッテ姿ヲ消シタ、今般後進ノ人士ハ之ヲ遺憾トシ大子駅開通四十周年ヲ記念シテ先生ノ像ヲ駅頭ニ再建シタ、先生逝イテ三十六年、今ヤ高邁ナ識見ト稀世ノ実践力ヲ併セ持チ国ヲ憂イ郷土ヲ愛シタ先生ノ英姿ヲ万人ノ仰ギ得ルコトトナッタ、沿線ノ緑樹愈々輝キヲ増シ産業文化興隆期シテ待ツベキモノガアル、ヨッテコノ美挙ガ郷土躍進ノ象徴トナルヲ信ジツツ先生ノ高徳偉業ト後進ノ人士ノ報恩ノ至誠ヲ録シ永遠ニ伝エルコトトシタノデアル

昭和四十三年十一月

茨城大学教授　塚本勝義撰
大子第一高等学校教諭　川又貞之書

鐵道水郡線竣成記助碑

鐵道水郡線竣成記助碑

政友會総裁正三位勲一等　鈴木善三郎　題額

我が石川の地は山間尓僻在し木石薪炭等乃物産豊富なるも運搬の便奈らさる越以て之を移出し難く且文化に浴する能はさるに識者乃常尓痛歎するところなり郷の鈴木秀助氏夙に之を憾上し鐵道敷設の必要なる越叫び有志と倶尓輿論を喚起す一方東白川郡白石禎美氏の白水線を敷設せんとする運動越起すや町長添田一二氏を首とし有志団結鐵道敷設期成同盟會越組織して関係の代議士を動かし當路尓陳情し白石氏の唱ふる白水線を變して郡水線たらしめ相呼應志天之か實現尓邁進し根本正白石義郎其外六名の代議士か衆議院に提出したる建議案は可決したるも實施越見さるを以て爾来石射文五郎其外代議士与り便尓建議案又之質問書を提出し努力の結果遂に鐵道院告示を以て起工を発表するに至りしも其事蹉跌す之を憾上志たる松浦勇氏百方盡瘁し昭和九年十二月其完成式を擧くる尓至る鈴木氏既に易責し嗣秀助氏其遺業越繼き私財を抛ちて盡力し又大戸仁太郎西牧初蔵の両氏同盟會常任幹事として活据甚た努む今茲四月有志胥謀り石を樹て諸氏乃功績越後世に傳へんと欲し文を予尓迄ふ乃ち其題末を銓次し以て梗概を叙す

昭和十年四月二十九日

貴族院議員正四位勲一等　富田光雄　撰

所在地　石川町字当町二百二十三番地　標高二百九十五米

当駅東側（町自動車駐車場）わきにあり、裏面に功労者・賛助員・発起人百二十二名の氏名が記されています。